

聖地巡礼の醍醐味

本郷 亮



歴史や小説の舞台となった土地を訪れるのが大好きだ。私の旅の多くは、そのような広い意味での聖地巡礼である。仕事の旅でさえ、こうしたささやかな「おまけ」をつけるほうが俄然ヤル気が出るのだが、そんなことをここで自信満々に語っても墓穴を掘るだけかもしれない。それはさておき、聖地巡礼の真髄は一人旅にある。何ものにも囚われず、どこまでも己の欲望に忠実に、しかもなるべくお金をかけず、気のすむまでロマンに浸りたければ、それは絶対に一人で行かなければならないのだ。とは言っても、そんな修行僧のような単独行ばかりでは寂しいので、人恋しくなるのが人情だ。二〇二二年下半期の直木賞作品・千早茜『しろがねの葉』の聖地巡礼のために島根県の世界遺産・石見銀山を訪ねたのも、気の置けない仲間と連れ立ってであった。私を含む四人全員がこの課題図書を（建前上）読

み、いざ出発。途中、鳥取県にある日本で最もアクセスが危険とされる国宝建造物「投入堂」に立ち寄りながら、オートバイで十時間ほど走り、温泉津の海辺のキャンプ場に到着した。温泉津は小説にも登場する往年の銀の積出港であり、千年以上の歴史をもつ良質の温泉によっても有名だ（温泉津の街並みも世界遺産に含まれる）。夜の闇の中で手際よく各自テントを設営し、簡単な食事をした後、皆で温泉へ。明日はいよいよ石見銀山の見学。小説のさまざまな場面や歴史の知識が思い起こされ、期待が高まる。

石見銀山で銀生産が本格化したのは、十六世紀前半に博多の商人・神屋寿禎が灰吹法による銀の精錬技術を導入したことによる。その後、大内氏、小笠原氏、尼子氏、毛利氏による銀山争奪戦が繰り返されてきた。豊臣時代はむろん、江戸時代

でも、同地は財政上重要な直轄領として支配され、特に関ヶ原の戦いの後に大久保長安が初代銀山奉行となっただけで人口も増え、大いに繁栄した（だが同世紀後半から次第に衰退する）。石見銀山の中心地である大森町はこの繁栄期に成立した鉱山町であり、代官所を核として武家屋敷と町屋が混在する大森エリアと、鉱山が点在する銀山エリアからなる。後者には「間歩」と呼ばれる大小多数の坑道があり、なかでも当時の奉行の名が付された「大久保間歩」は最大の生産量を誇った大当たりの巨大間歩であった。小説『しろがねの葉』は、戦国末期から江戸初期にかけてのこうしたシルバーラッシュのなかで、山師・喜兵衛に拾われ育てられた少女ウメの人生の物語である。聖地巡礼の旅を通じて、このような歴史の知識が私自身の人



史跡石見銀山遺跡 龍源寺間歩入口

生となる。すなわち旅の経験を通じて、書物から得た抽象的・学問的な知識が、五感と結びついた生身の私的な思い出と一体化する。楽しみの相乗効果である。だから聖地巡礼はやめられない。ちなみに直木賞作品に限れば、①津本陽『深重の海』（一九七八）、②今村翔吾『塞王の楯』（二〇二二）、の聖地巡礼も忘れたい。①は明治期の和歌山県太地町の鯨漁師とその家族を描いたもの、②は戦国時代の近江大津の石垣（いわゆる野面積み）職人集団である穴太衆の物語で、湖を隔てた近江長浜の鉄砲職人集団である国友衆との相克を描いたものである。

さて、私は歴史小説をこよなく愛するのだが、知人の日本史研究者にとっては、歴史小説は「宿敵」なのだそう。かくいう私も専門は経済学史・思想史なので、その理屈はよくわかる。小説によって創り出される印象は強いので、史料のみに基づくべき歴史学の客観的認識・評価が歪んでしまうからである。無意識に影響を受けることもあろう。また小説がベストセラーにでもなれば、無数の読者が歴史的事実から乖離した強力な「世論」のようなものを形成するかもしれない。歴史学は「現代社会」とどう対峙すべきか。なるほど深刻な難問である。が、とりあえず歴史小説ファンの一人として、自分は日本史研究者でなくてよかったと思う（すみません）。

（関西学院大学 ほんこう・りょう）